

死をも覚悟した病床で見つけた希望の光。

西条教会 小野晃代さん

平成26年1月、小野晃代さんは急性リンパ性白血病に罹り、医師から「治療をしなければ余命は一ヵ月」と告げられた。抗がん剤治療が始まってからも、余命宣告が頭から離れることはなく、死の恐怖はあらゆるかたちで小野さんを追い詰めていった。しかし、入院後まもなく、仲間から届けられた仏教関係の書籍を読むことで、心を落ち着かせることができた。そして、一緒に届けられた研修会の予定表には、講師として2年先まで自分の名前が記されており、「あと2年は生きられる!」と希望の光が差し込んだ。投薬治療の合間の一時帰宅では、45年連れ添った夫、子どもや孫、そしてずっと心配してくれていた仲間たちとのふれあいが、さらに病氣と闘う勇気を奮い立たせてくれた。現在も入退院を繰り返しつつ経過観察が続けているが、「最後までお母さんらしい生き方をしていたね」と、子どもたちにそうしてもらえるように、小野さんは“いま”を精いっぱい生きている。



老いの輝き

いま日本には、後期高齢者と呼ばれる七十五歳以上の人が千六百四十二万人いるそうです。この後期高齢者の「後期」という言葉に、「光」と「輝(かがや)く」の二文字をあてた「光輝(こうき)高齢者」という表現を目にしたことがあります。七十五歳をすぎて、ますます光り輝く——高齢者が元気に活躍するイメージが伝わり、気持ちが高まるようになります。

しかし、老いにはほかの世代にはない輝きがある一方で、つらいと思わせられる現実があることも否定できません。当人のみならず、高齢の家族を介護されている人からすれば、光り輝く高齢者という言葉もきれいなことに聞こえ、むしろ「お金もかかり、面倒なことも」と、やり場のない思いを溜め込んで苦しんでいる方もおられるでしょう。ただ、人にはいえない苦労や複雑な思いを抱え、愚痴をこぼしながら、それでも「元氣になってほしい」と願う。心の奥底で、一所懸命に尽くしたいと思う。そういうあなたの深い思いやりの心を呼び覚ましてくれたのは、間違いなく介護を必要とするその家族です。だとすると、介護をする人の慈悲心に灯をともしきつかけとなった家族の姿こそ、光り輝いていると形容するにふさわしいと思います。